

# 助動詞「た」の一解釈

——形式名詞「とき」につづく場合を中心に——

紙 谷 栄 治

(一)

日本語のテンス・アスペクトについては、現代語の場合に限ってみても、すでにさまざまな観点から論じられている。その研究史については高橋太郎氏<sup>1976</sup>が詳しく、また現段階における研究の整理としては鈴木重幸氏<sup>1976</sup>が示唆にとんでいる。詳細はそれらの論文にゆずり、次に本稿でとりあげる問題に限って概観することにした。

金田一春彦氏<sup>1958a</sup>は、現代日本語におけるテンス・アスペクトがきわめて整然とした体系をもつものであることを示され、以後の研究に大きな影響をあたえた。氏は終止用法を中心に考察されたが、その後の諸氏の研究によって、終止用法と連体用法とのあいだに、テンス・アスペクトの点で種々の相違があり、テンス・アスペクトにおいて重要な位置をしめる「た」においてそれが著しいことが指摘された。終止用法については鈴木重幸氏の一連の論文<sup>1957, 1958, 1965</sup>など、連体用法については高橋太郎氏の一連の論文<sup>1973, 1974</sup>などにおいて詳細に論じられている。また最近では変形文法の立場から、井上和子氏<sup>1976</sup>がテンス・ア

助動詞「た」の一解釈

スペクトの総合的な解釈を示された。

本稿では、主として「た」の連体用法、とくにそれが時をあらわす語句(代表的なものは形式名詞「とき」)を修飾することによって形成される時をあらわす従属節(たとえば「私が手紙を書いたとき、」)の中で用いられた場合を中心に、「た」がテンス・アスペクトにどのようにかわっているかについて考えることにし、現代語におけるテンス・アスペクトの体系をとらえる試みの一段階としたい。具体的には次の二点について検討し、私見をのべたいと思う。

- (I) 一般に従属節中のテンス・アスペクトは主文のテンス・アスペクトによって決定されると考えられているようであるが、私見のように両者は無関係なものであると考えることはできないであろうか。
- (II) その場合、従属節中、特に時をあらわす語句を修飾することによって形成される時をあらわす従属節の中で、テンス・アスペクトはどのような体系をもつと考えられるか。

なお、本稿の段階では、テンス・アスペクトの体系について十分な見通しを得ていないため、テンス・アスペクトなどに関する用語を規定する

ことができないままに使うことになるが、この点は今後の課題としたい。

本稿では紛らわしさを避けるため、次のように表記する。

- (i) 例文を引用する場合には、もとの文献において付されている番号などをそのまま用いた。ただし例文に付された出典名は省略した。
- (ii) 本稿では、従属節中の「た」の有無を「た」と「く」によってあらわす。「くとき」は動詞がただちに「とき」につづくことを、「たとき」は動詞が「た」を介して「とき」につづくことをあらわす。
- (iii) 「トキ」という語は、名詞として使われる場合には「とき」、物理的な時間として使われる場合には「時」、文法用語として使われる場合には「テンス」と表記する。

(一)

この章では(一)としてあげた問題、すなわち従属節と主文の間の時に關する問題をとらあつかう。

従属節と主文の間の時に關して、金田一春彦氏 1955b は「完了態(タ)」の項で次のような見解を示された。

次に述べられる事柄あるいは話してゐる時より以前であることを表はす。

例：去年ナクシタ時計ガ出テ来タ。(出て来たよりもなくした方が以前であることを表はす)

アシタ試合ニ勝ツタ組ワ決勝ニ出ル。(決勝に出るよりも試合に勝つ方が以前であることを表はす)

オ金ガアツタラ君ニ融通シヨモノオ。(融通するよりも、お

金がある事態の方が以前であることを表はす)

アツノ月ガ出タノ(月の出が発言より以前であることを表はす)

去年京都カラ帰ツテ来タ。(帰京が発言より以前であることを表はす)

ココニワ、昔本陣ガアツタ。(話してゐる時よりも本陣の存在が以前であることを表はす)

氏の見解は、収録された本の性質上詳しくは説明されていないが、従属節中の「た」の有無が、主文の時を基準としてそれ以前・以後をあらわすという考え方は、次の諸氏の見解にもみられるように、今日においてもなお広く認められているようである。

高橋太郎氏 1974 はテンスを「絶対的なテンス」と「相対的なテンス」とに分けられ、「拡大成分」においては両者が認められるのに対し、「述語動詞」においては前者のみが認められるとされた。氏は「相対的なテンス」を次のように説明される。

拡大成分のなかの動詞のテンスのめだった特徴は、基本成分に従属するという機能の性格の反映として、述語のテンスに従属する傾向をおびることである。つまり、述語のしめす動作や状態のなりたつ時を基準にして、それより以前か以後か、またそれと同時にあらわすことである。これを相対的なテンスとよぶ。(43p)

鈴木重幸氏 1976 もテンスを「絶対的なテンス」と「相対的なテンス」に分けて、次のように考えられた。

連体的につかわれたばあいには、すでにのべたように、ムードの対立から解放される。そこで、一定の条件のないかぎり、現実との

関係が間接的になり、それに応じて、テンスの意味もずれて、相対的なテンスの意味をもつようになる。相対的なテンスというのは、時間をあらわす基準が発話時からはなれて、主文のあらわす動き・状態のなりたつ時間を基準として、それよりまえ（相対的な過去）か、それよりのち（相対的な未来）か、それと同時に（相対的な現在）かをあらわすものだ。

パリにいく友だちに羽田でであいました。「パリに行く」のは「羽田であう」よりのち——相対的な未来

あしたはやくきた人は先生のしごとを手つだってください。

「あしたくる」のは、「手つだう」よりまえ——相対的な過去

そばにいる人にタバコの火をかりた。「そばにいる」のは、「火をかりる」ときと同時——相対的な現在（57p）

また、井上和子氏1976は、従属節・関係節などにかけて詳細に考察されたが、基本的には次のような考え方にたっておりおられる。

日本語の時制辞は、本来は相を表わし、最上位の時制辞の持つ「±完了」の素性にたいして、発話時（すなわち現在）という基準が与えられる。この時、時制辞を取っている最上位の述語の「±状態」の素性が「時」の決定に重要な役割を果たすことは、すでに見たところである。このようにして決定された最上位の時制辞にたいする「時」の解釈から、次々に下位の時制辞にたいして、順を追って、すぐ上位の述語に与えられた「時」の解釈との前後関係を見て「時」の解釈が加えられていく。（181p）

以上に引用した諸氏の見解では、共通して従属節中の「た」の有無が

### 助動詞「た」の一解釈

従属節と主文との時の先後関係をあらわすとされている。しかしながら、従属節中の「た」の有無が、必ずしも従属節と主文との時の先後関係をきめるものでないことは、次の例文をみても明らかである。

- (1) その会議に出席した人は、三時に会場前のロビーに集った。
- (2) 大阪を明朝六時に発車する名古屋行のバスは、到着後すぐおりかえして大阪行になる。

例文(1)の場合には、「会議に出席した」とあとで「三時に会場前のロビーに集った」とも、「その会議に出席」するために、前もって「三時に会場前のロビーに集った」とも解することができる。また例文(2)の場合も、従属節中に「た」がないという理由で、従属節の時は主文の時よりも後であると考えることはできない。

以上の例文は一般の名詞を修飾することによって形成される従属節の場合であるが、本稿で主としてとりあげる、時をあらわす語句を修飾することによって形成される時をあらわす従属節の場合においても同じことがいえる。

- (3) この船が太平洋を横断した時には、
  - a 日本で燃料をつみこんだ。
  - b 日本で燃料をつみこんでいた。
- (4) 彼がこの論文を書いた時には、
  - a 彼は多くの図書館を訪れて調査した。
  - b そこにとりあげたいいくつかの論点について、数人の研究者がすでにとりあげていた。
- (5) 彼が失脚した時には、

a 彼の部下がまっ先に反旗をひるがえした。

b 背後でいろいろな策動があった。

(6) 昨年そのチームが優勝した時には、

a 一日に十時間も練習をした。

b だれもがそれを予想しなかった。

例文(3)と(6)では、a bにかかわらず、時のうえで従属節が後、主文が先という関係がなりたっている。したがって、この場合にも、従属節中の「た」の有無によって、従属節と主文との時の先後関係をきめることはできないのである。

(3)と(6)の例文は、従属節と主文の両方に「た」がある場合であるが、そのほかに

(7) 彼が援助してくれる時には、そのような問題は容易に解決した。

のように、主文だけに「た」がある場合、

(8) 彼が援助してくれた時には、そのような問題は容易に解決する。

のように、従属節だけに「た」がある場合、また

(9) 彼が援助してくれる時には、そのような問題は容易に解決する。

のように、従属節と主文のいずれにも「た」がない場合が考えられる。しかし例文(8)以外は、いずれも従属節中の「た」の有無によって主文と従属節の時の先後関係を考えることはできない。例文(8)の場合には、従属節中の「た」によって、従属節の時が主文の時より先という関係がなりたっているが、例文(9)と比べてみると、従属節中の「た」が従属節と主文の時の前後関係をあらわすためのものであるかどうか疑問である。

以上のような従属節中の「た」が従属節と主文の時の先後関係をあら

わすとは考えられない場合の処理については、高橋太郎・鈴木重幸両氏のようにテンスに二種を認める立場では、「絶対的なテンス」をあらわすと考えて、従属節と主文との時の先後関係は存在しないとされるようである。しかしテンスを二種類にわけた場合には、それらがどのような条件のもとであられるかを明らかにする必要があるが、鈴木重幸氏が指摘されるようにまだ十分調査されていないのである。

そこで本稿のとるべき方法としては、一つは「相対的なテンス」の存在を認めて、それと「絶対的なテンス」との関係をあきらかにしていく、もう一つは、「相対的なテンス」とされているものを別の観点から再考してみる、の二つの方法が考えられる。

第一の方法をとるためには、「相対的なテンス」の存在を認めることが前提となる。しかし私はそれを否定するだけの根拠をもっていないけれども、次にのべるような理由で、その存在を認めることには消極的である。第一に、時をあらわす語句を修飾することによって形成される時をあらわす従属節の場合には、すでにみたように、従属節中の「た」の有無によって、従属節と主文との時の先後関係を一律に決めることはできない。たとえそのような時の先後関係があるとしても、それにあてはまらない例は数限りない。したがって、両者の時の先後関係にもとづいてたてられた「相対的なテンス」の存在には疑問の余地がある。第二に、同じく時をあらわす語句を修飾することによって形成される時をあらわす従属節の場合に、次の例文のように、もともと従属節と主文とのあいだに時の先後関係が存在しないと考えられることがある。

(10) 私がその会議に出席する(または出席した)時には、一市民の資

格で出席する（または出席した）。

(11) 私が前回のハイキングに参加した時には、十二キロ歩いた。

第三に、一般の名詞を修飾することによって形成される従属節の場合においても、例文(1)(2)のように、もともと従属節と主文との時の先後関係を考えることはできないと考えられる。

以上にのべた理由によって、「相対的なテンス」を認めることには疑問の余地がある。したがって、本稿では「相対的なテンス」をたてないことにするが、そうすれば「相対的なテンス」と「絶対的なテンス」をどのように処理するかが問題となる。そこで第二の方法、すなわち従属節中の「た」を別の観点から考えるところという方法をとることにして、次章においてそれを論じることにする。

### (三)

まず次の例文の従属節中の「た」について考えてみる。

(12) この論文を書いたときには、私は前もって先生に相談した。

(13) この論文を書くときに（は）、私は先生に相談した。

(14) この論文を書いたときに（は）、私は先生に相談した。

高橋太郎・鈴木重幸氏などの見解にしたがえば、例文(12)では従属節が主文の時より後という関係にあるので、従属節中の「た」は「相対的なテンス」ではなく「絶対的なテンス」をあらわし、例文(13)では、従属節の時が主文に比べて後、例文(14)では先という関係がなりたつので、従属節中の「た」は「相対的なテンス」をあらわすということになるだろう。「絶対的なテンス」についてはあまり問題はないが、「相対的なテンス」

助動詞「た」の一解釈

については、本稿ではそれを認めない立場にたっているので、別の解釈が必要である。そこで、まず例文(12)～(14)における「書く」と「書いた」の意味を比較することからはじめたい。

例文(12)の「書いた」は「書く」という動作がかって行われたことをあらわしている。一方、例文(13)の「書く」は「書く」という動作がこれから行われようとすることを、例文(14)の「書いた」は「書く」という動作がすでに完了していることをそれぞれあらわしている。つまり、例文(12)は動作の形態を分析しないで全体として一つの動作とみて、その動作がかって行われたことをあらわすのに対し、例文(13)(14)は動作を「これから動作にとりかかろうとする」または「動作が途中の過程を経て完了した」という特定の形態に分析してあらわしているということが出来る。

このように例文(12)と(13)(14)の間には動作の把握のしかたに一定の相違があると認められるが、その相違は何にもとづくのであろうか。私は結論から言えば、例文(12)の従属節中の「た」はテンスをあらわすものであり、例文(13)(14)の従属節中の「た」の有無はアスペクトをあらわすものと考えられる。このように考えるならば、高橋・鈴木両氏の「絶対的なテンス」は本稿の「テンス」と、両氏の「相対的なテンス」は本稿の「アスペクト」と対応することになる。なお本稿ではテンスに二種の別をたてないで、単に「テンス」とよぶことにする。

右のような大胆な結論をいきなりのべることになってしまったが、そのような結論にいたった理由について次にのべることにする。まず、右のべた結論で最も問題になるのは、テンスよりはむしろアスペクトを認めたことと思われるので、その点についてややくわしくみることにし

たい。

今日、日本語における「アスペクト」という概念は確定しているとはいえない。それにもかかわらず、「た」がそれをあらわすとしたのは次にあげる理由による。

(一) 例文(13)(14)にみられるように、従属節中の「た」の有無によって、動作を分析して把握したところの特定の様態をあらわすことができる。次章でのべる「将然」「既然」「過程」「完了」がそれであって、それらは一つの体系をなすと考えられる。

(二) 従来アスペクトをあらわすとされていたものの中に、「はじめる」「かける」「および」「てしまう」「おわる」などがある。金田一春彦氏(1955)は前者を「始動態」、後者を「終結態」とし、アスペクトに属するとされた。「はじめる」を例にとると、「書きはじめる」の「はじめる」は「書く」という動作の始動をあらわす。しかし、その始動がすでに実現されているのか、それともこれから実現されようとしているのかはあらわせない。それは、「書きはじめるとき」「書きはじめるとき」のように補助動詞につづく「た」の有無によってあらわされるのである。すなわち、これらのアスペクトをあらわすとされる補助動詞も、一般の動作動詞と同じく、それにつづく「た」の有無によって、次章でのべる「将然」「既然」「過程」「完了」の意味が付加されると考えられるのである。

(三) 従属節中の「た」の有無によって、テンスとは明らかに異なるものをあらわすことがある。

(15) 小屋は、川を渡る所に一軒あり、渡った所にも一軒ある。

(16) 道路が細くなる(または、なった)所に標識がたっている。

「渡る」「細くなる」は「そのような動作・状態になろうとするところである」、「渡った」「細くなった」は「すでにそのような動作・状態になってしまった」の意味をあらわしており、それぞれ次章でのべる「将然」「既然」にあたりと考えることができる。また「ところだ」「たところだ」の場合にも全く同じことがあてはまるのである。

以上を総合すると、いわゆるアスペクトをあらわすとされる動詞をもふくめた大部分の動詞(状態動詞をのぞく)にあてはまり、また時とはまったく関係のない場合にもあてはまる、次章でのべるところの「将然」「既然」「過程」「完了」は、動作の様態を分析的にあらわしたものであることができるのであるから、アスペクトと名づけることができると思う。

なお、従属節中の「た」の有無がアスペクトをあらわすことについては、すでに高橋太郎氏(1974)が指摘されている。

これらの例では、いずれも述語のしめす状態や動作と同時に成り立つ動作をあらわしていて、「する」と「した」の対立は、動作のおこし(9)または過程(10)(11)をあらわすか、終了成立(12)をあらわすかというアスペクトの面に対立している。

⑨ 私の来る時には、まだお生れになったやうな様子は御座いません。

⑩ 三人でその低い石段をのぼるとき素子が何かのはずみで足をすべらし、前へのめって段々に手袋をはめた手をついた。

⑪ 今来る時、あの人に逢ったわ。

⑫ 十分に成熟し、黄色くなったものを選んでかき採らないと、乾燥して出来上った時に品質が落ちる。(44p)

氏が従属節中の「た」の有無がアスペクトをあらわすとされたことに本稿は基本的に従っている。ただ、氏が「動作のおこし」とされたものを本稿では「将然」とし、「終了成立」とされたものを「既然」と「完了」とに分けて考えた。

#### (四)

前章において、従属節中の「た」の有無はテンスのほかにアスペクトをもあらわすと考えた。そこでこの章ではアスペクトの意味がどのような体系をなしているかについて考えることにする。

(17) (先日) 山をおりるときに、思わぬ人に会った。(下山する途中)

(18) 山をおりたときに、はじめて人に出会った。(下山したあとで)

(19) (先日) 山をおりるときに、思わぬ人に会った。(下山しようとしたときに)

(20) 山を少しおりたときに、道を見失った。

右の例文(17)は「おりる」、例文(18)は「おりた」という形をとっているが、この四例は「おりる」という動作を分析してそのなかの特定の様態をとりあげている点が共通している。例文(17)は、「山をおりる途中」といえることができ、「おりる」という時間的な経過を伴う動作の過程にあることを示している。例文(18)は「おりる」という動作が完了したことを示している。なお、ここでいう完了とは、継続的な動作をあら

わす動詞の場合にのみ、その動作が途中の過程を経て終了したことを意味する。一般に「完了」と言われる場合は、本稿の「完了」と「既然」の両方にまたがっているが、本稿では以上にのべた理由でわけて考える。例文(19)は「山をおりようとする」といえることができ、「おりる」という動作がまさに始まるうと示していることを示している。なお、これは「おりはじめる」と異なることは前にのべたとおりである。例文(20)は、すでにそのような動作に着手したことを示している。また以上の説明から、(17)と(18)、(19)と(20)がそれぞれ対をなしていることがわかる。

以上のべたように、従属節中の「た」の有無は、動作のさまざまな様態を示し、それが意味のうえで体系をなすと考えて、アスペクトをあらわすものと認め、例文(17)(18)(19)(20)の意味を簡単に「過程」「完了」「将然」「既然」と名づける。

これを動詞の種類との関係についていえば、いわゆる継続動詞は最大限四つの意味をあらわすことができるが、いわゆる瞬間動詞は「将然」と「既然」の意味だけをあらわす。

つぎに、他の動詞をつかった例をあげておく。

(21) 庭の掃除をするときに、ほこりがたたないように、何度もうち水をした。(過程)

(22) 庭の掃除をしたときに、客が来た。(完了)

(23) 庭の掃除をするときに、前もってうち水をした。(将然)

(24) 庭の掃除をしたときに、はじめてその庭の手入れのよさにおどろいた。(既然)

以上は「とき」という語を修飾することによって形成される時をあら

わす従属節についてみてきたのであるが、一般の名詞を修飾することに  
よって形成される従属節の場合も、基本的には同じことがいえる。

- (25) 山をおりる人で道が混雑した。(過程)
- (26) 山をおりた人が思い思いに休憩していた。(完了)
- (27) 山をおりる人とすでに出発した人が大半だ。(将然)
- (28) 夜明け前までに山をおりた人は、途中で太陽がのぼる美しい光景  
をみることができる。(既然)

以上、従属節中の「た」の有無がアスペクトをあらわす場合について  
みてきた。なお細部に論ずべき点もあるが、先にすすみたいと思う。つ  
ぎに、テンスをあらわす場合を考えなければならぬが、それはアスペ  
クトの場合にくらべて複雑なようであり、またテンス・アスペクトにつ  
いての全体的な見通しが必要であるから、詳細は別稿にゆずることに  
し、本稿では概略をのべるにとどめる。

従属節中の「た」の有無がテンスをあらわすことはすでにのべたと  
おりであって、「た」のある形は「過去」の意味をあらわすと考えてあ  
まり問題はないように思う。一方「た」のない形は「現在」「未来」の  
意味をあらわすことが大部分であろうが、「一般的な真理」「属性」「習  
慣」をあらわすことは広く認められているとおりである。そのほか、  
(29) きのおおみえになるかたが、まだみえない。

のように過去をあらわす語とともに用いられることがあって、「予定」  
とでも名づけたい意味をあらわすことがある。それらの意味はテンスに  
属すると考えていいようであるが、それらを細分せずに「非過去」と名  
づけておく。次に過去と非過去の例をあげておく。

- (30) これまでも野党の勢力がのびた時には、その政策が多くの人々の  
共感を得ていたが、今後野党がのびる時には、その実績に対する評  
価も加わってしよう。(過去と非過去)
- 以上にのべた従属節中の「た」の有無によってあらわされる意味を表  
にまとめるとつぎのようになる。

テンスによる対立	アスペクトによる対立		た
	非過去	過去	
	将然	過程	完了
	過去	既	然

(五)

以上、主として「とき」などの時をあらわす語句を修飾することによ  
って形成される時をあらわす従属節の場合を中心に考察してきた。それ  
を中心としてとりあげた理由は、すでに高橋太郎氏<sup>1974</sup>にのべられてい  
るとおりである。

動詞は、拡大成分のなかでつかわれると、そのテンス・アスペク  
ト的な性格を変容させる。規定語としてはたらく連体形動詞のばあ  
いもその例にもれないが、このばあいには、さらに、あとののべる  
ようにテンス・アスペクトからの解放過程の要素がからんでくるの  
で、まず、純粋にテンス・アスペクト的な性格をもつものとして、  
時間の形式名詞へつながって時間Ⅱ状況的な拡大成分となるばあい  
の「する」と「した」の対立についてのべる。(43p)



その結果、「た」はテンスとアスペクトの両方にかかわるといふ結論に達した。またこの結論から次のことがみちびき出せる。

(一) 時を指定する方法としては、過去・現在・未来という時の延長上の一点として指定する方法と、一つの動作の様態、すなわち「将然」「既然」「過程」「完了」によって指定する方法とがあるといえる。「とき」などの時をあらわす語句を修飾することによって形成される時をあらわす従属節は、この両方の方法を用いて時を細分し明確にしたうえで指定することができる、という特色がある。この点で、一般の名詞を修飾することによって形成される従属節中のテンス・アスペクトはいろいろな要素が入るため、その判定が困難であることが多い。

(二) 今日「た」に「過去」と「完了」(ここにいう「完了」とは一般に用いられているものであって、本稿で用いた「完了」とはまったく異なる。この点についてはすでにのべた)の二つの意味をみとめる考え方が広く行われている。鈴木重幸氏<sup>1976</sup>はこの問題を次のように解釈されている。

きのうは月がでた。

毛沢東がしんだ。

このイスはきのうはとなりのへやにあつた。

ほら、東の山に月がでたよ。

いま電報がきました。

春がきた。

坊や、しばらくみないうちに、大きくなつたね。

このイスはきのうからここにあつた。

助動詞「た」の解釈

これまで、はじめの三例の意味を「過去」、あとの五例を「完了」とよんで、この形に二つの意味をみとめることがおこつた。しかし、いわゆる完了も過去における動きの実現であつて、純粹にテンス的な(時間的な)意味は、このばあいも過去だろう。いわゆる完了と過去とは、ともに過去における実現であつて、そのちがいは、大まかにいって、実現ののち、すなわち現在に結果や状態がのこっている(なんらかの形で現在の状態を規定している)か、あるいは過去における実現だけを問題にして、現在の状態との関係はとわなにかのちがいだ。とりあえず、ここでは前者をペルフェクティブな過去、後者をアオリスト的な過去とよんでおこう。(55p)

私は、氏が「ペルフェクティブな過去」「アオリスト的な過去」と名づけられたものは、それぞれ「既然」および「過去」をあらわすと考える。また氏は両者をテンスに属すると考えられたが、私は前者はアスペクト、後者はテンスに属すると考える。私は、両者は動作を過去・現在・未来という時の流れの上に位置づけるか、あるいは動作をその状態によつて分けるかのちがひであつて、本質的に異なつたものと考ええる。しかし、氏が論じられた終止用法のばあいには、実際には区別がつけがたいことも多いと思う。

(三) 従来、「相対的なテンス」とされていたものは次のように解釈することができる。「相対的なテンス」を認める立場では、従属節中の「た」の有無によって、従属節の時が主文の時にくらべて「以前」「以後」「同時」であることがあらわされると考える。しかし本稿の立場では次のようになる。

(13) この論文を書くときに(は)、私は先生に相談した。

では、従属節の「書く」が「以後」をあらわすのではなく、主文の「相談した」時点において「書く」という動作がこれからなされようとしていた(将然)ことをあらわしているのである。そのために結果的に、従属節の時が主文の時より後という関係がなりたっているにすぎないのである。

(14) この論文を書いたときに(は)、私は先生に相談した。

においても、従属節中の「書いた」が「以前」をあらわすのではなく、主文の「相談した」時点においては「書く」という動作がすべての過程を経て完了していた(あるいは、すでに着手していた(既然))ことをあらわすと考えることができる。そのため結果的には従属節の時が主文の時よりも先という関係がなりたっているにすぎないのである。また従属節の動詞が「過程」をあらわす場合には、結果的には従属節と主文とが同時という関係がなりたつわけである。

以上の検討では、終止用法の場合のテンス・アスペクトの関係、他のアスペクトをあらわす形式との関係、テンス・アスペクト・モード相互の関係については全くふれていないが、今後稿を改めて論じたい。

〔引用文献〕

- 金田一春彦1955a 「日本語のテンスとアスペクト」(『名古屋大学文学部研究論集X』金田一編1976に再録)  
 1955b 「日本語」(『世界言語概説』下巻 研究社)  
 1976 『日本語動詞のアスペクト』(むぎ書房)  
 鈴木重幸1957 「日本語の動詞のすがた(アスペクト)について——ノスルの形

と〜シテイルの形」(金田一編1976に発表)

1958 「日本語動詞のとき(テンス)とすがた(アスペクト)——ノシタと〜シテイタ」(金田一編1976に発表)

1965 「現代日本語の動詞のテンス——言いきりの述語に使われたばあい——」(『ことばの研究』第2集 秀英出版)

1976 「日本語動詞の時について」(『言語』1976年12月号 大修館書店)  
 高橋太郎1973 「動詞の連体形「する」「した」についての一考察」(『ことばの研究』第4集 秀英出版)

1974 「連体形のもつ統語論的な機能と形態論的な性格の関係」(『教育国語』39)

1976 「日本語動詞のアスペクト研究小史」(金田一編1976)

井上和子1976 『変形文法と日本語(下)』大修館書店